日本医療機能評価機構認定病院

那珂川病院だより

VOL.48 平成23年5月

〒811-1345 福岡市南区向新町2丁目17-17
TEL.092-565-3531（代）
FAX.092-566-6460
http://www.nakagawa-hp.com
（携帯電話でもご覧いただけます）

病院理念 ― 思いやりそして努力　奉仕そしてよろこび

困難を乗り越えて

院長　下川 敏弘

今年の3月11日に起きた東北地方太平洋沖地震では、大変なことが起こってしまいました。お亡くなりになった方々のご冥福と、被災地の一日も早い復興をお祈りいたします。

この度の大地震についてマスコミ、特にテレビやインターネットの映像で知らされる現実は、私たちが日常生活していた環境では想像していなかったことばかりで、この北部九州での平穏な生活との違いにも愕然としました。徐々に復興が進みながらも、原発問題が常に不透明なまま報道され、特に同じ原発でも福島と女川でのあまりの違いには、注目すべきものがあるように思えます。これらのことは、私たち医療従事者が日々、患者さんやご家族のことを思いながら活動をしていることや、医療における危機管理が重要といわれ、さまざまな工夫を凝らしていることなどが対比して頭に浮かんできます。

当院では、微力ながら何らかの形で被災者の方々とつながっている気持ちが大切と考え、全職員に対し、日頃の節電・節水についてさらに節約をすることを勧め、しかも日常の生活・活動は変わらず行うことを呼びかけました。一番大切なのは精一杯、今を大切に生きることだからです。さらに、社会医療法人として少しばかり支援を会議で決定し、福岡県医師会の医療支援チームの派遣にも登録しました。これからもまだまだ長い道のりと幾多の困難が続くと思われますが、日本だけでなく世界中の人々の思いと力で、必ず乗り越えられると信じています。

最後に、5月に当院は増築工事を終え、6月からは管理棟（茶色ブロックの6階建て）の改修工事に入ります。まだ、しばらくはご迷惑をお掛けするかと思いますが、ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

ベニバナイチヤクソウ

出会い・別れ・そして感謝

原澤 美紀

私の夫は、60歳で大腸がんが見つかり、その1年後には、腰椎と胸椎に転移していることが分かりました。そのため、下半身が麻痺して手術もできない状態となりました。そこで、7月16日から約2カ月間、緩和ケア病棟でお世話になりました。転院当日、主治医の荒木先生が病室に訪ねていらした時、初対面にもかかわらず、夫が長々と(30分以上だったと思います)自分の思いを語っていたことを、昨日のように覚えています。

その間、先生は中腰のまま寝ている夫と同じ目の高さで、うなずきながらじっと話を聴いてくださいました。もうその時、私は、「ここでよかった」と、確信いたしました。それまで夫は、体の痛みや不安感でイライラすることも多かったのですが、日1日と穏やかな表情になり、私にはまるで仏様のように見えることもありました。とは言っても、胸に水が溜まるようになると、「息苦しい、息苦しい」と訴え、そばで見ていてもどうしてやることもできず、ただ手をにぎっているだけでした。「もう十分がんばったからいいだろう」「そうね。もうがんばらなくていいよ」。

そして、夫は、「ここで死ねるのは、幸せだ」と、言い残し最後の時が静かに訪れました。9月12日、夕方のことでした。亡くなったその夜、「お父さんが寂しくないように」と子ども達3人と私で、病室の床にふとんを敷き、体を寄せ合って寝たことも、きっと他の病院ではできなかったことでしょう。

那珂川病院緩和ケア病棟で過ごした2カ月は、「夫との別れ」のつらさと同時に、「人との出会い」の尊さを感じる日々でした。患者や家族の気持ちを大切にし、その気持ちにしっかりと寄り添ってくださった先生方や、看護師さんほかスタッフの皆様に、今でも感謝の気持ちでいっぱいです。このご恩は、ずっと忘れません。ありがとうございました。

― 夏祭り ―

息苦しさの苦痛緩和について

緩和ケア担当医師　荒木 貢士

癌に伴う症状と聞いてみなさんはどんな症状を思い浮かべますか?　まず第一に痛みが頭に浮かぶと思います。もちろん痛みも生じやすい症状ですが、それ以外にもいろいろな症状が出現します。前回、痛みの緩和についてお話をさせていただいたので、今回は息苦しさの苦痛緩和について少し述べさせていただきたいと思います。

息苦しさというと非常に怖い症状というイメージがあるかもしれません。もしも息苦しさという症状が出てきた場合、改善できる原因があるのであればまずそれを行います。例えば胸に水が溜まって息苦しさが起きている場合は、胸に針を刺して水を抜く処置を行います。それでも症状が改善しなかったとしても心配する事はありません。今は息苦しさに効く薬もあります。

どういった薬を使用するかというと医療用の麻薬を使用します。麻薬というと痛みがある時に使用すると思われるかもしれませんが、麻薬には息苦しさの感受性を低下させ症状を改善する作用があります。さらに咳を抑える作用もあります。痛みの緩和の時に述べましたが、医療用の麻薬は決して危険な薬ではなく、使い方を守って使用すると非常に良い薬なのです。

癌というと非常に怖い病気と感じ、それに伴う症状というともうどうしようもないというイメージが先行していると思いますが、痛みをはじめ、それ以外の症状も今は薬で緩和できる事が多くなっています。もし癌にかかってしまったとしても1人で悩まれることなく、専門の先生に早くご相談される事を強く望みます。

緩和ケアにおける看護

4階病棟看護師　近本 洋子

私は今、緩和ケア病棟で働かせていただいています。毎日大変なことも多々ありますが、とてもやりがいのある病棟です。患者さんやそのご家族は、様々な期待や希望を持って入院して来られます。私たちスタッフはそれぞれの希望に合わせて、ケアを提供していきます。

ある時は痛みなどの症状の緩和に努め、またある時はその方の魂までも苦しめてしまうような、辛い気持ちに心を合わせていきます。ある時は今の時間を有意義に楽しく過ごしていただくように、季節の行事を催していますし、人生でやり残したことを悔いのないように、成し遂げていただくことのお手伝いもしています。

このように身の回りのお世話や身体症状や精神症状の緩和だけではなく、患者さん自身の生活のコーディネートにも携わっています。それに先立って、まず人として仲良くなり、信頼関係を作ることが大切になります。すぐに仲良くなれる方もおられれば、多少時間が必要な方もおられます。誠心誠意、真心を持ってお世話させていただきながら、同じ人間として接することで、より良い人間関係を築きたいと努めています。辛いことは共に辛いと感じ、嬉しいことは共に喜び、悲しい時は一緒に涙することもあります。心が揺れておられる場合には、それに付き合って共に揺れます。

主役は患者さんとそのご家族であり、私たちはそっと優しく必要な所に手を差し伸べたいと思っています。どうぞ皆さん一度、病棟を気軽に訪れてみてください。明るく楽しいスタッフがお待ちしています。

緩和ケア病棟施設概要

病室：全病床20床＋予備室1室で全室個室です。
室料あり：7室、 室料なし：13室（予備室は室料なし）

その他の設備：食堂・談話室、ファミリーキッチン、家族控室（宿泊可・有料）、面談室、説明室、介護浴室、一般浴室、洗濯コーナー、サンルーフ

緩和ケア病棟へのご入院について

- 主に、治癒が望めないと判断された悪性腫瘍の患者さんをケアします。
- 患者さんまたはご家族が病名・病状について理解していることが入院の条件です。
- 体調が安定したら、外泊したり、退院して緩和ケア外来に通院したり、在宅ケアを受けることもできます。在宅ケアは当院の在宅医療部が担当します。

緩和ケア外来・相談のご案内

緩和ケア外来を受診される方や入院の相談や見学を希望される方は、必ず電話予約をお願いいたします。

- **電話受付時間**　平日 9:00 ～ 17:00
  TEL 092-565-3531（代）
  連携室のソーシャルワーカーが対応します
- **緩和ケア外来**　受付時間（予約制）火・水・木曜日 13:00 ～ 16:30
  通院での緩和ケアも行います。緩和ケア病棟退院後の診療も行います。

入院費について

医療費は、健康保険制度による給付割合に従った料金です。
高額医療給付制度の適用があります。

回復期リハビリテーション病棟のこれまでと今後

リハビリテーション部
主任　我那覇　宗浩

当院の回復期リハビリテーション病棟は、平成18年9月に開設し現在5年目に入っております。

回復期リハビリテーション（以下リハビリ）病棟とは、名称の通り「リハビリ医療」が中心の病棟ですが、それは理学療法士・作業療法士・言語聴覚士のリハビリスタッフだけで成り立っているわけではありません。1人の患者さんに対して医師をリーダーとして、リハビリスタッフ・看護師・介護職・医療相談員・薬剤師・栄養士など多職種でチームを作り治療計画を立てていきます。そしてリハビリ室での訓練だけではなく、リハビリで達成された動作、能力を生活の場である病棟・自宅で活かせるように何度となくカンファレンスを行い、方向性・目標を決めていきます。その検討内容を病棟で導入し安全に生活が送れるように、チームで入院時から退院までの一貫した援助体制をとっています。

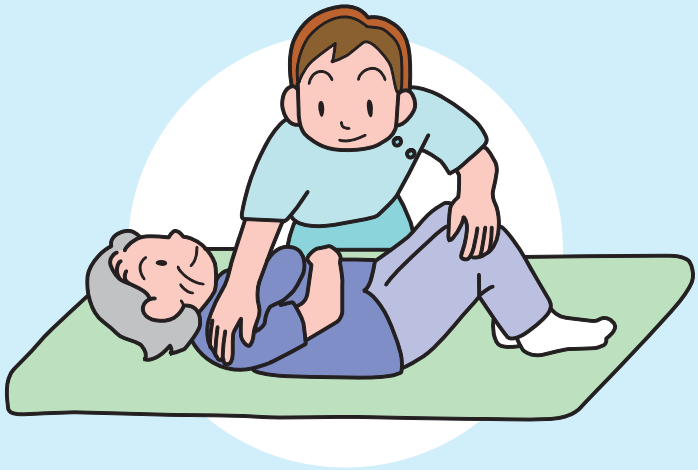
回復時リハビリ病棟の質を評価する国が定めた評価基準に、居宅（自宅や老人ホームなど病院、老人保健施設以外の生活の場）へどれだけ帰れたかという在宅復帰率という指標があります。回復期リハビリ病棟として一定の質が担保されていると判断されるのが60%以上です。当院では開設当初より約70%以上の在宅復帰率で推移しておりましたが、スタッフの増員により365日リハビリを提供できる体制をとることで、近年では約80%の在宅復帰率を維持しております。

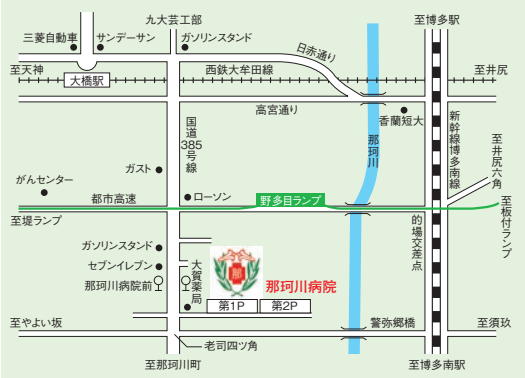
現在、新棟の建設工事が行われております。この建設工事の目的の1つに老朽化したリハビリ棟からのリハビリ室の移転が含まれております。この移転によりリハビリ室と回復期リハビリ病棟が直結し、病棟と一体化することでより充実したリハビリ医療が提供できることと期待しております。

また、作業療法室には1DKタイプの日常生活訓練室を設置いたします。ここでは玄関の出入りやトイレ動作はもちろん、炊事洗濯・入浴動作、和室での動作訓練など、自宅環境を可能な限り再現した訓練が行えるようになります。ここはリハビリ部としての設備ですので、回復期リハビリ病棟の患者さんだけでなく一般病棟に入院中の患者さん、外来患者さんも訓練可能となっております。

まだまだ力不足ですが、訓練環境の充実と各職種スタッフのスキルアップを図り、さらに良いリハビリサービスを提供し患者さん、ご家族の満足度を上げるべく更なる努力を続けていく所存です。

これからも宜しくお願いいたします。





【交通】西鉄バス系統番号4番・47番・62番・620番
「那珂川病院前」下車すぐ　■駐車場150台

常勤医師診療担当表

医師名	担当領域
下川　敏弘	消化器外科、呼吸器外科、透析
大国　貴史	消化器外科、透析、漢方
古賀　健資	消化器外科、呼吸器外科
吉村　寛志	大腸・肛門外科、消化器外科
坂本　清人	消化器内科
宮脇　龍一郎	循環器内科
筒井　伸一	消化器内科
大内田　敏行	放射線科

医師名	担当領域
片桐　邦彦	脳神経外科
金宮　八重子	脳神経外科
原口　勝	緩和医療
荒木　貢士	緩和医療
古賀　善彦	リハビリテーション科（回復期）
熊澤　浩明	外科
福永　昌幸	麻酔科・外科・救急
竹内　一馬	血管外科・循環器内科

平成23年5月1日現在

那珂川病院　赴任のご挨拶

竹内 一馬 医師

はじめまして、平成23年4月から常勤医として勤務させていただきます竹内一馬と申します。とりあえず、はじめましてとご挨拶させていただきましたが、実は、平成11年4月からの半年間は非常勤医として、また平成15年4月からは1年間、大学からの出向で常勤医として勤務させていただいたことがあり、私にとって那珂川病院は懐かしの愛着ある病院なのです。この病院で再び勤務できますことを心より嬉しく思っています。

今回、私がこの病院に赴任してきたのには理由があります。一つ目は、疾病による下肢の切断を少しでも減らしたいという想いです。世界では糖尿病の合併症のために30秒に1人の足が失われている現実があります。食生活の欧米化による肥満、糖尿病の増加、透析医療や血管内治療（カテーテル）の進歩による動脈硬化末期症状の患者さんの増加、少子高齢化の進行など、さまざまな要因から、今後の日本社会において足に何らかのトラブルを抱えた患者さん（すなわち足病患者）は増加していくことが予想されます。しかし、日本では、このような患者さんを総合的に診療している先生は僅かです。このような環境の中、循環器・脈管（血管）専門医として、外科専門医として今までの実績を生かして、多くの足にトラブルを抱えた患者さんを救いたいと考えています。二つ目は、大学病院のように大きな組織での横断的診療ではなく、フットワークが軽く、患者さん個々のことを考えたオーダーメードの診療を行いたいという想いです。三つ目は、地域医療に根ざした高齢者医療（老年医学）の一環としてお年寄りに優しい医療をしたいという想いです。血管を含め身体が超人的に若返ることはありません。加齢という老いを受け入れながらも健やかな血管・筋骨格を維持して、生活の質を保つサポート役になりたいと願います。

那珂川病院に赴任する前は、福岡大学病院にて、下肢静脈瘤はもちろんのこと、多くの血管疾患・心臓疾患・足病疾患にかかわってきました。当院では、循環器（心臓病・血管病）、足病（糖尿病性足病変、巻き爪・陥入爪など）、生活習慣病（高血圧・高脂血症・糖尿病）、下肢静脈瘤、高齢者医療など幅広く診療を行っていきます。

健康に過ごすためには歩くことが重要です。日本人の靴文化はまだ浅いため、日本人は足や靴への関心が薄く、問題があっても未解決のままにしてしまうことが多いようです。元気に歩けることは、高齢者の転倒予防や骨密度の維持、心身の健康維持、心臓血管病（脳梗塞、心筋梗塞、閉塞性動脈硬化症）の発症予防などにとても重要なことです。足は第二の心臓ともいわれ、健康の源です。

「健康は足元から!!」一人でも多くの患者さんに、元気な足で健やかな生活を送っていただくことを願って、問題の解決に取り組んでいます。外来はお待たせすることもありますが、お気軽にご相談ください。

循環器（心臓病）・血管病：心臓が悪い（虚血性心臓病［狭心症・心筋梗塞後後遺症］、心臓弁膜症、心不全など）と言われて専門医を受診したことがなく不安な方、閉塞性動脈硬化症などの血流障害、動悸などの不整脈でお困りの方、大動脈瘤と診断されたがどの治療を受けるか迷っている方、などは是非ご相談ください。循環器専門医・脈管（血管）専門医としてご相談に乗りたいと思います。

下肢静脈瘤：ふくらはぎなどに血管のこぶがあるが診てもらったことがないので気になる。足がよくむくむ・冷えるなどの症状がある方は、ご相談ください。漢方薬などの投薬治療や、下肢静脈瘤の場合は、圧迫療法や生活指導を行います。また、外科的治療が必要な場合は、当院にて手術が可能です。手術までは必要としない方の場合は、外来にて局所注射（硬化療法）を行います。前勤務先である福岡大学病院では、下肢静脈瘤のほとんどの症例の外来診察を行い執刀・指導してきました。他院で手術が必要と言われたが、手術はなるべく望まれていない方、足のじゅくじゅくした傷（静脈うっ滞性潰瘍）が治らないなど悩まれている方は是非、受診をお勧めいたします。

フットケア外来：以前の経験で、血液透析を受けられている患者さんや閉塞性動脈硬化症（足の血流不足）、糖尿病の患者さんが陥入爪を放置されたため、感染によって足趾切断となった症例がありました。また、手術や、薬物治療によって心臓の機能は良くなったにもかかわらず、リハビリテーションが進まず、その原因が巻き爪による疼痛であったこともありました。心機能が低下している患者さんでは下腿のむくみ（浮腫）も多くみられ、また、浮腫の原因が腎機能の低下が原因の場合や、下肢静脈瘤である場合もあります。そのような疾患を多く診ていることもあり、足に関するトラブルの相談を多く受けます。

「巻き爪」は本来、皮膚科や形成外科で治療されることが多いですが、そのような背景もあり、フットケアの一環として「巻き爪・陥入爪」の治療も積極的に行っています。「巻き爪」ごときでは、わざわざ、皮膚科や形成外科に行くことを躊躇したり、また、医師にも相談されずに自己治療されている患者さんもおられるようです。症状や原因疾患にもよりますが、以前は局所麻酔下に抜爪術が多く行われていました。最近では、苦痛を伴わない非侵襲的なプレートやワイヤーによる矯正治療が発達するようになりました。

現在行っている治療法（VHO法）では、爪を伸ばすまで待つことなく施術が可能で、施術当日から入浴も可能です。日常生活には全く支障を来さない優れた方法であり、若い人だけでなく、糖尿病・閉塞性動脈硬化症などの合併疾患を持った高齢者にも非侵襲的な治療法であり、自由診療にはなりますが非常に有益な治療です。血液をさらさらにする薬（抗血小板剤やワーファリンなど）を飲んでいる方でも大丈夫です。

VHO式矯正技術は（1）専用のスチール鋼を爪の大きさに合わせて切り、爪の湾曲状態に合わせてワイヤーを湾曲させる。（2）これを爪の左右に引っ掛け、専用のフックを用いて巻き上げ、固定する。（3）余分なワイヤーをカットした後、人工爪でワイヤーの固定部分をカバーする、という手順で施術します。

爪の横に引っ掛けたワイヤーは、一見、食い込んで痛いように見えますが、血管が走っている真皮内まで突き刺すわけではないため強い痛みを感じることはなく、出血もしません。従って、通常は麻酔の必要もありません。

固定したワイヤーは爪の伸びとともに前方に移動するので、施術して約3カ月後に付け替えを行います。これを半年から1年くらいかけて矯正していきます。医療機関での施術費は日本では保険適用がないため、自由診療となります（ドイツなどのヨーロッパでは保険診療可能）。しかしこれを手術治療した場合の、術後1～2週間も続く痛み、醜く完治した爪、手術そのものにかかる費用等を考えれば、それほど高いものではないと思われます。お困りの患者さんがおられましたら、外来にお尋ねください。爪の状態、原因疾患を確認させていただき、治療の方針を決定させていただきます。原因によっては、再発もありますので、併せて原因治療も行っていきます。

また、前述のように現代社会は糖尿病による下肢切断が増えています。下肢を温存可能な治療法の一つとして、無菌ウジ虫を用いた壊疽治療（マゴット療法）があげられます。この治療で100%切断を免れられるわけではありませんが、切断が必要であると宣告された患者さんにとっては、副作用もほとんどない良い治療法であり、有益であると考えます。皆さんが治療可能ではありませんが、是非ご相談していただければと思います。

フットウェア外来：熊本有園義肢（ウェルフィット）の義肢装具士である有薗泰弘氏とともにオーダーインソール・靴作成を行っており、好評を得ています。足の不具合が生じるのは、普段履いている靴があっていないことも大きな要因の一つと考えられます。

当院では、医師の処方により専属の義肢装具士がオーダーメイドインソールを作成します。また、患者さんの足に適合した靴も一緒にお選びいただけます。

装具製作費は、保険適用となりますが、納品時に一時的に全額立て替え払い（7万円前後）となり、後日、国民健康保険など保険者に申請すれば7割（70歳以下）もしくは9割（70歳以上）相当額が払い戻されます。ただし、病状によっては保険適用とならない場合があります。外反母趾、開張足、扁平足、足趾切断術後、足趾変形などでお悩みの方は、ご相談ください。

プライベートに関して：美味しいものを食べ歩くことが好きです。それ以外では、クラシック音楽を中心とした音楽鑑賞や（ほとんど練習していませんが…）フルート演奏などが趣味です。フルートオーケストラなどの企画運営にも携わっていますので、患者さんや病院スタッフの方でご興味のある方は、気軽にお声をおかけください。当院は、音楽療法にも力を入れていますので、積極的に加わりたいと思っています。

NPO法人 足もと健康サポートねっと（現在申請中）：
九州圏内の医療関係者（義肢装具士・看護師・理学療法士・医師など）と靴・インソール製造や販売を含めた靴業界、フットケアサロン業界などの連携を図ることで、足（脚）に悩みを持った方々の問題解決を、速やかに行えるようなサポートを行うことを理念として設立いたしました。市民イベントなども企画していきます。是非、皆様にご協力いただけると幸いです。インターネットで「足もと健康サポートねっと」などで検索していただけると活動内容がご覧いただけます。

HP（ホームページ）:http://ashimotokenko.com/
福岡足ネットワークプロジェクト（NPO前身）:
http://blog.passoand.com/?cid=67028

以上、簡単ですが赴任の挨拶とさせていただきます。今後とも皆様どうぞよろしくお願いいたします。活動内容は今後外来やHPにてご案内していく予定です。

那珂川病院だより（平成23年5月号）VOL・48 発行 那珂川病院 編集 日経メディカル開発